

セルジュ・ゲンズブールの歌『マノン』について考えてみたい。長編小説『騎士デ・グリュウとマノン・レスコーの物語』は、オペラや映画として表現されてきた。「マノン」は「男たちを破滅させる女」である。ゲンズブールはその中にどの女の根底にもある「女の本質」を見抜いていたのだろう。そして「どんな男でも理性で抵抗できない愛」を知っていたのだろう。長編小説を短い詩という形に凝縮して表現したところにゲンズブールの優れた頭脳が見える。そしてそのポイントを吸い上げる能力が演出力である。さらに「マノン」を自分の世界に変換できるのが応用力である。

『マノン、おまえにはきっとわからない、俺がどれほど嫌っているのか、お前という奴を』—愛を与えておきながら感情の趣くままに身を翻すお前には解らないだろう。俺を虜にしておきながら通り過ぎていく愛を俺が嫌っていることを。そうでなかったら—もし俺がお前を、あるいはその愛を嫌うことが出来なかったら—『Je t'aurais déjà perdue (俺はとっくにお前を失っていただろう)』 気になるのはこの「perdue」である。「消える、失くす」の他に、古語的解釈として「破滅させる、亡き者にする」という意味がある。ストーカーではないが、もし「通り過ぎていく人」を嫌うことが出来なかったら、相手を破滅させてしまうだろう。もし「通り過ぎていく愛」を嫌うことが出来なかったら、愛自体を失ってしまうだろう。そして別の側面から見ると「嫌う」という感情があるから俺はお前を思い出す。それは俺の中でお前への愛がまだ生きている証拠だ。それがなければ俺はお前をとっくに忘れることが出来たろう。心の中から去って行ってくれないお前への愛に苦しむことをどれほど嫌っているのか、俺への愛をすでに捨て去ったお前にはわからないだろう。

こういう理性的な分析で通り過ぎていく愛を納得し、真面目な愛を認識できる一方で、自然発生する解析できない不真面目な感情の認識がある。『Perverse Manon(倒錯のマノン)Perfide Manon (不実のマノン)』—「Perverse」は性的な倒錯を意味する。

『Il me faut t'aimer avec un autre(俺はおまえをそれ以外で愛さなければならない)』—「他を伴って」「別の面をもって」愛することが必要だ。けれど『Je le sais à non(俺にはわからない)Cruelle Manon(残酷なマノン)』 「Cruelle」には「つれない」「厄介な」という意味がある。日本語で一口に「残酷」という中にもいろいろな解釈がある。つれないマノン。俺は他の愛し方を知らない。

物語の中で、マノンの美貌に惹かれて始まった愛—他人に愚かだと笑われても諦められない愛—金品の贅沢よりも心の安らぐ愛を求めていながら宝石に囚われて自分を救う道を逸した愚かなマノン—それでも一緒にいなければ「狂ってしまうだろう」デ・グリュウ。真実の愛を持ってない不実の果てに、真実の愛を持つデ・グリュウの腕の中で息を引き取るマノン。やはり人類の愛の希求は「真実」であることに辿り着く。

そしてゲンズブールは冒頭の言葉を繰り返す。『Non tu ne sauras jamais Manon(いや、お前には決してわからないだろう、マノン)』 『A quel point je hais(俺がどれほど嫌っているのか)Ce que tu es(お前という奴を)』しかしそれに続く言葉は反転する。

『Au fond (結局、実のところ) Je prends avoir perdu la raison(俺は正気を失っている)Je t'aime Manon(愛している マノン)』要するに心の底では理屈抜きに愛している。「男たちを破滅させる女」であろうとも、愛は理性で選ぶことは出来ない。(2013.8.24)